

## マルクス主義の定義

—— 理論と実践との統 ——

加藤 正

マルクス主義を一口で定義すれば、スターリンのレーニン主義の定義にならって、「プロレタリア階級闘争の理論と戦術だ」ということになるだろう。レーニンの『カルル・マルクス』では、「労働者運動の理論と綱領」という風に表現している。この簡明な定義は案外普及していない。その代り、マルクス主義はプロレタリアートの世界観だとか、そのイデオロギーだとかという定義の方が俗受ぞくうけがするようだ。

これからすると、「レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命時代のマルクス主義、即ち一般にはプロレタリア革命の理論と戦術、特にプロレタリア独裁の理論と戦術だ」というあの有名な定義は、「レーニン主義とは、帝国主義とプロレタリア革命時代のプロレタリアートのイデオロギーだ」というふうに言いかえられる。

この言いかえによって、何ごとかがあきらかになるかといえ、ちつとも何もあきらかにならない。マルクスやレーニンがプロレタリアートの階級闘争のための「理論と戦術」を作りあげたのちに、これをプロレタリアートの世界観、哲学、理論、イデオロギーとよぶのは、決して不都合ではない。だが、その意味は、あくまでプロレタリアートの階級闘争の理論と戦術だという点にある。

しかし、右の言いかえが一步をすすめて、「プロレタリアートの立場からする見解（認識）の体系」だという、意味のあいまいな観念に転化されると、これは少々問題だ。こういう観念は、マルクス・レーニン主義を「プロレタリア階級闘争の理論と戦術」、特に戦術（政策）として把握することに現実的な関心を有せず、階級闘争の観念的

反映である思想闘争、理論闘争の中で動いていたところの「哲学者」が発見したものであって、戦術においてはじめて理論とプロレタリアート（実践）との統一が実現することを無視して、思想闘争の中に、ある立場での見解とということの中に、既に理論とプロレタリア闘争の実践との統一が実現しているという主張を内包している。

なるほど、歴史においてプロレタリア階級が成長したために、政治、経済、制度、その他の事象は、この階級に對する関係において新しい「面」をあらわし、在来思想がその面からいわば批判されはじめるのは当然であつて、そういう批判としての思想闘争は、その意味でたしかにプロレタリアートの階級的立場と統一されている。そういう「統一」を認識論にもりこもうとしたのが、「プロレタリアートの認識体系またはイデオロギーとしてのマルクス・レーニン主義」論なのだ。しかしながら、マルクス・レーニン主義の本領はそこにあるのではなく、イデオロギー闘争または思想的批判を越えて、実践的な批判と克服にすすむ点にある。それは、イデオロギー闘争の現実の基底をなす現実的關係の解明と、その關係を止揚する現実の主体の解明とを條件にする。つまり、現実の実証されるがままの關係をとらえてゆく科学の立場に立たねばならない。すなわち唯物論の立場に立たねばならない。ところが、この認識論的立場たるや、社会的人類の総実践との統一において發展してきた一切の諸科学を前提とするものであつて、プロレタリアートの階級的立場とは、その拠つて立つべき次元を異にしている。その限りにおいて、唯物論、すなわち実証科学的認識の立場は、階級的認識の立場の否定としてあらわれる。

この相互否定の關係は、私が福本イズム・三木哲学に對して唯物論を代弁しながら登場した最初からの主張である。その後、同学諸君は、この二つの立場を折衷して、「プロレタリアートの実践の利益のために、その階級の本能や動向に適応して、自然、社会、思考を科学的に解明する唯物論」というふうな規定を立てた。しかし、考えてもみるがよい。ありのままの、実証されるままの關係でとらえられた現実は、それが誰の利益にならうとなるまいと、誰の動向や本能に障らうと障るまいと、誰のために誰によつてなされたものであらうと、依然としてただその

ような現実なのだ。各種各様の社会的主体のお気に召そうが召すまいが、結果を顧慮せず、いかなる結論をもおそれず、現実を実証されるがままの関係をとらえてゆくのが唯物論である。こういう立場において、それは他のどんな立場をも排除して、自分自身の立場を一貫する。理論と実践との統一は、前の段階におけるように、単に理論がある階級の動向に照応するという形態を脱いで、理論と対象との一致という形態をとってあらわれる。これにとつては、そのような照応如何は、外的な、どうでもよい、無頓着な規定であつて、こんな蛇足をふらさげてみたところで、事柄は少しも変らない。

この唯物論の立場は、他のどんな立場とも折衷させえず、それ自身の立場を貫くものだとすれば、階級的立場もただ現実の上に成り立てるままのものとして認識対象となるという形でしか、この唯物論的立場へはいつてこないのである。こういう形で、一旦否定され排除された階級的立場が唯物論的理論の中へ回復される。この否定の否定において、はじめて理論は階級実践との統一をあらわすところの戦術（政策）となる。

最近、『理論』3号において、松村一人君が理論と戦術を、对象的認識と実践的認識という形で特徴づけ、実践的認識の解剖の問題を提出している。これは、同学諸君の側における一進歩として、高く評価したいと思う。実践的認識という表現にはあるくさみがつきまとうが、いまはそれにふれない。ありのままの、実証されるがままの現実の関連の把握には、社会的人類のありとあらゆる種類の主体の諸実践（はたらきかけ）が前提となつていうことはいうまでもない。しかしながら、唯物論、即ち実証科学的認識の面へはまださしあたり開き出されてはいない。しかし、そういう実践が現にあるかぎりには、認識の一步一步において、認識の上を開き出されずにはいない。すなわち、对象的現実の関連の中に編みこまれ、その中において本性と機能を規定された対象として認識にのぼってくる。自然認識に関連しては、実験観測手段、および労働手段の認識、すなわち技術として、思惟法則の認識に関連しては、方法論として、そして社会認識に関連しては、何らかの社会的主体の機能にもとずいて現状の変革の形態を規定す

る科学的政策あるいは戦術として。思考と対象との一致という形態における理論と実践との統一は依然としてその形を持続しつつ、すなわち実証的認識たる本性を一貫しつつ、技術あるいは戦術へと高められる。これは理論と実践との、理論の上における最高の統一形態であつて、それがさらに進めば、もはや理論の枠はやぶられ、実践の上での理論と実践との統一、すなわち技術的あるいは戦術的实践に止揚しやうされる。これらの点のくわしい分析は、別稿「唯物論における哲学の問題」にゆずるとして、以上のような考察が、これまで同学諸君によつて、唯物論に對立する意味での客観主義とか、純粹思惟の立場から人間実践の觀照をこととする立場としてしか理解されていなかつたということを、ここに指摘しておきたい。

これらの諸君は、思想闘争の中へプロレタリア的立場をもちこむこと、それに關連して種々な思想を批判し、評価し、再評価すること、あるいはそのための認識論を提出することをもつて、具体的、実践的であると考え、理論を戦術へと發展させること、あるいはそのための認識論を提出することをもつて直觀的、觀照的と考えたのである。レーニンがマルクス主義を定義して、「労働者運動の理論および綱領としての現代唯物論と科学的社會主義」と言ったことは、よく味わつてもらいたいと思う。この理論というのは、あらゆる科学的發見に應じて面目を一新してゆくといわれた現代唯物論、社会的人類の総実践との統一において展開してゆく実証的認識の成果の總体であつて、そういう認識の關連の中に労働者階級（プロレタリアート）の客觀的な姿を解明してゆくのがこの理論である。労働者運動の綱領とは、この理論をおしすすめて、労働者階級の動きと、自余の社會との相互關係の發展の解明から、この労働者階級を楨杆ちうかんとして社會關係が變革される條件と形態を把握してゆく戰術的理論である。

（一九四七・七・一九）

- 『加藤正著作集』第二巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。